

スウェーデン・サーミの生活と意識(2)

——サーミの政治・社会意識——

群馬大学 新藤 慶

1 目的

本報告は、北欧の先住民族サーミの政治・社会意識の実態を明らかにすることを目的とする。サーミの人々は、他の世界の先住民と同様、国民国家の形成に伴い、それぞれの国家から同化と抑圧を強いられてきた。しかし、戦後の権利意識の向上を基盤に、先住民としての権利回復の運動が活発化し、サーミの復権と再生の動きが強まっている(小内 2013)。そこで、サーミの人々の意識を探ることで、今後の復権と再生のあり方を考えたい。

2 方法

スウェーデンのサーミ議会の有権者名簿をもとにした郵送調査で得られたデータを分析した。調査期間は2014年1~4月、対象者は1,225人、有効回収は332票(回収率27.1%)である。

3 結果

サーミの意識を捉える際、多様性が見落とせない。まず、トナカイ所有による差異がある。サーミの主産業はトナカイの遊牧であったが、国境設定やサーミ以外の人々の入植により、遊牧を断念した者も生じた。その結果、サーミ内にも利害の差異が表われ、特に定住と遊牧という生業をめぐる対立が生まれた(庄司 1991)。そこで、トナカイを「現在飼っている」者(31.7%)、「かつて飼っていた」者(33.7%)、「飼っていない」者(34.6%)にわけてみると、「サーミ民族」に愛着を感じる者は、「現在飼っている」者が96.8%、「かつて飼っていた」者が84.4%であるのに対し、「飼っていない」者は75.7%と割合が低い($p<.001$)。政府に望むサーミ政策をみても、たとえば「サーミの土地・資源に対する補償をすべき」を重要とする者は「現在飼っている」で91.2%、「かつて飼っていた」で79.4%、「飼っていない」で69.7%となる($p<.001$)など、トナカイ所有と政府への要望の程度に関連がある。

また、サーミ語能力も多様性を生む要因である(新藤 2013)。そこで、「サーミ語が話せる」者(49.8%)と「サーミ語が話せない」者(50.2%)にわけてみると、「サーミ民族」に愛着を感じる者は「サーミ語が話せる」者で94.2%、「サーミ語が話せない」者で74.5%であった($p<.001$)。一方、「スウェーデン」に愛着を感じる者は、「サーミ語が話せる」者で84.8%、「サーミ語が話せない」者で95.9%であった($p<.001$)。つまり、サーミ語が話せないサーミは、「サーミ民族」より「スウェーデン」に愛着を感じている。政府にサーミ政策を望む程度も、サーミ語が話せる者に比べて低い。

しかし、スウェーデン社会にも問題はあつた。スウェーデンに「人種・民族による不公平」があるとする者は、「サーミ語が話せる」者で87.2%、「サーミ語が話せない」者でも78.6%である($p<.01$)。差はあるが、サーミであることによる差別を受けている者が未だ多いことがうかがえる。

この問題に対し、可能性を持つのは若いサーミである。今後、スウェーデン以外のサーミと「連携を深めていくべきである」とする者は、「60歳以上」で82.2%、「40~50歳代」で92.3%であるのに対し、「20~30歳代」では98.1%とかなり多い($p<.01$)。サーミの連携を進め、問題に対峙しようとする若いサーミの意識は、復権と再生に伴いサーミ語やサーミ文化を重視する動きの成果とも捉えられる。

4 結論

サーミの意識には、トナカイ所有やサーミ語能力によって差異が生じていた。しかし、復権と再生が進みつつも、サーミ全体への差別は今も根強く残っている。この問題を解決するためには、サーミの連携を深めようとしている若いサーミたちの果たす役割が大きくなるだろう。